



解熱鎮痛剤について



解熱鎮痛剤とは

解熱鎮痛剤とは、発熱や痛みを緩和する効果を持った薬のことをいいます。いわゆる「熱さまし」や「痛み止め」と呼ばれるものです。

解熱鎮痛剤の代表格「NSAIDs」が効く仕組み

解熱鎮痛剤の成分として多く利用されているものに、非ステロイド性消炎鎮痛剤（NSAIDs：エヌセイズ）と呼ばれる成分のグループがあります。NSAIDsは、プロスタグランジン（PG）という、痛みを増強させたり、発熱を引き起こしたりする物質が体内で作られるのを抑える薬で、結果として痛みや発熱を抑える効果があります。

解熱鎮痛剤の代表的な有効成分

成分名	特徴
アセトアミノフェン	脳の体温調節を司る中枢に作用することで、熱を体外へ逃がす機能を強めて体温を下げると考えられています。妊娠中や授乳中の方や子供にも比較的安全に使えるとされています。
アスピリン	古くから利用されている薬です。止血を妨げる効果もあるため、出血しやすい人や、血液をサラサラにする薬を飲んでいる人が使用する際には注意が必要です。
イブプロフェン	アスピリンと比べて強い鎮痛作用を持つとともに、胃腸への影響が少ないとされることから、痛みや発熱に対して幅広く使用されています。抗炎症作用を持ち、喉や関節などの炎症（腫れ、赤み、熱感など）を伴う痛みがある際にも用いられます。
ロキソプロフェン	解熱・鎮痛作用を発揮し、鎮痛作用が強いとされています。そのままでは薬としての効果を発揮しない状態（プロドラッグ）で胃腸へ届き、胃腸から吸収された後に薬としての働きを持つ物質に変換され、効果を発揮します。そのため、胃粘膜への刺激作用が弱いという特徴も持っています。

※一部の喘息患者で解熱鎮痛剤の服用により急激な喘息発作やアレルギー症状を誘発することがあるため、特に過去に解熱鎮痛剤を使用して喘息発作やアレルギー症状を起こしたことのある人は、医師・薬剤師に相談しましょう。

新型コロナワクチン接種後の副反応時にも使用できますか？

新型コロナウイルスに対するワクチン接種後に、注射した部位の痛み、疲労、頭痛、筋肉や関節の痛み、寒気、下痢、発熱などといった症状（副反応）が見られることがあります。

副反応はほとんどの場合、接種翌日をピークに数日以内に回復しますが、症状が気になる場合には、発熱や痛みに対してアセトアミノフェンや、イブプロフェン・ロキソプロフェンなどのNSAIDsといった市販の解熱鎮痛剤で対応することも可能です。ただし、接種後に副反応の症状が出る前から予防的に解熱鎮痛剤の使用を繰り返すことは、現在（2022年9月）のところ推奨されていないので注意しましょう。

解熱剤を使っても効果は一時的なもので、あまりよくないと聞きましたが、本当ですか？

解熱剤は一時的に熱を下げる目的に使う薬で、病気の根本的な治療になる薬ではありません。しかし、熱を一時的に下げた楽にすることは、体の回復に必要なこともあります。解熱剤は使い方次第で役に立つ薬です。



【参考】

・国立成育医療研究センターHP
・アリナミン製薬：
<https://alinamin-kenko.jp/tokushu/genetsu/>